

『冥報記』データベースへの道程

—漢文翻訳説話のデータベースをいかにして構築するか—

相田 満

国文学研究資料館

概要:中国では早くに失われたが、日本にはなお残存する貴重な典籍の一つ『冥報記』は、後世の説話集への影響のみならず、平安時代当時の読み方が残された典籍としても貴重である。我々は古訓点に従った完全な訓読・注釈・索引化を果たす過程で、その電子化・データベース化を行った。資料の性質上、作業は決して容易ではなかった。その理由の一つには漢字の問題もある。また、漢文訓読文という独自の文体の索引を作成するために、「句節」という単位系を導入する必要があった。しかし、この研究成果により、説話文学の研究は、より詳細な比較研究が可能な次元に踏み込んだと言える。

A route until it makes the database of the account of "Meihouki"

—How is the database of the tale literature which translated Chinese writing built? —

Aida, Mitsuru

National Institute of Japanese Literature(NIJL)

Outline.:The influence on future generations which it had has very large "account of Meihouki".And it is precious also as writing to which the reading at the time of the Hirayasu time was left behind. We translated the data and created the database.

The work was by no means easy. There is also a problem of a Chinese character in one of the reasons. Moreover, the new view needed to be introduced in order to create the index of the original style of a reading-in-the-Japanese-pronunciation sentence. They are a phrase and a paragraph index.

However, it can be said that research of tale literature trod in the dimension in which a more detailed comparative study is possible by this research result.

1.はじめに

中国では早くに失われたが、日本にはなお残存する典籍の一つに『冥報記』(唐・唐臨撰)がある。諸本には3本が確認され、しかもほぼ全貌を留めている点で貴重である。最古の京都高山寺蔵奈良朝旧鈔本のほかに、1105年(堀河天皇長治2年)の書写奥書を記す前田家尊経閣文庫写本、知恩院蔵本などが知られている。

なかでも前田家本は、平安時代当時のヲコト点(乎已止点・遠古登点とも)が使用された訓点(乎已止点)が全編にわたり記されるだけでなく、その訓点に従った訓読文が、表現上でも比較的近接した時代(1120-1140代)に成立したと思しき『今昔物語集』に採録される本作出典の説話と密接な関わりがある点で注目される。そこで、このことを客観的に検証可能とするべく、前田家本『冥報記』を当時の訓点体系に従って訓み、『今昔物語集』のように異なる文体・言語と比較対照することが可能な電子テキストとデータベースを作成することに取り組んだ。

2. 仏教説話集『冥報記』について

1) 執筆動機

中国・朝鮮半島経由で日本に渡来した仏教が様々な社会階層への浸透を果たした要因には、それ自体の教義だけでなく、それを荘厳するさまざま先進技術や儀礼とそれを支えた社会的活動、さらには仏教世界を題材とした文学・音楽・絵画作品など、人間の感覚に訴える文化的・芸術的成果物の力も大きく与っていた。

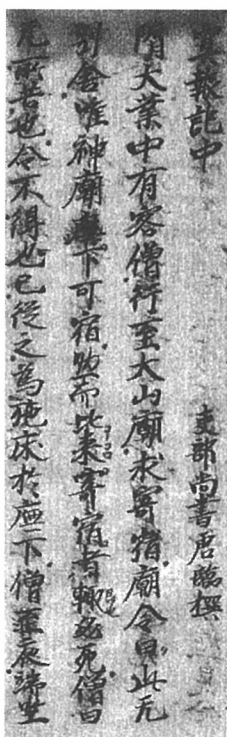
その内、文学の方面で大きな役割を果たした仏教説話集の一つに、『冥報記』(唐・唐臨撰)

がある。これは平安初期に成立した日本最初の仏教説話集『日本国現報善悪霊異記（日本霊異記）』（全3巻）において、「昔漢地に冥報記を造り、大唐国に般若験記を作りき。」（序文：原漢文）とあるように、その規範に仰がれた書に挙げられるものである。

さらに『日本霊異記』は、『三宝絵』以下に続く諸説話集への影響が甚大でもあるので、日本の仏教説話の流れの淵源という意味でも、この『冥報記』という作品がいかに大きく関わってきたな影響を与えたかということは推して知れよう。

唐臨は僧侶ではなく、司法官として著名な人物であった¹⁾。そこで、『冥報記』の執筆を志した動機には、①唐臨の祖父が寺院の施主としてあった縁、②自身の内発的な気持ちによったこと、③僧侶たちの求めによったこと、④当時流行の志怪小説から脱却して新たに仏教世界奇跡譚を題材とすることに文人意識が刺激されたことなど、一般的に仏教説話集に言われることに加えて、司法官たる唐臨の人間性に由来する理由も想定し得る。すなわち、『冥報記』に、仏教の因果の「理」により物語られる説話が集められ、善悪を懲明し、将来を勧戒するその趣旨で貫かれていることから、現世の法律と因果応報という仏法の理によって人々の行いを正そうとする意図も考えられるのである。

2) 前田家本『冥報記』の特徴

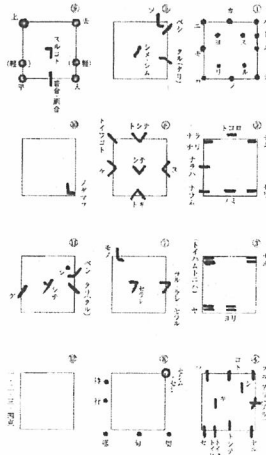


前田家本『冥報記』には「第二群点」に属する「喜多院点」によるワコト点が付される。

ワコト点とは、平安時代から漢文の訓点に用いられた符号で、一般には返り点・音韻を示す声点・仮名などとともに使用された。現在二百種類近くが見つかっており、その始まりは9世紀初めまで遡る。当初は文献ごとに別種のものが使用されて統一性はほとんど無かった。10世紀平安中期のころから、特定の形式が次世代にわたり継承される現象が生じ、前田家本『冥報記』が書写され当時の12世紀院政期になると、ワコト点の種類はわずか十数種類に集約されている。

ワコト点は、戦後初めて実証的体系的研究に取り組みされた中田祝夫氏により、発生古い順に、「第一群点」から「第八群点」までの八分類がなされたが、後に築島裕氏は「第二群点」の方が「第一群点」に先行すると考えるに至っている。

「喜多院点」（第二群点）は、「東大寺点」（第三群点）とともに平安時代初期から平安時代中期以後まで息長く伝えられた一つである。「喜多院点」は9世紀初頭に元興寺法相宗の明詮大僧都（789-868）により使用され、一時中絶したものの10世紀末頃から再び興福寺法相宗において復興、以後同寺を中心に法隆寺・高野山などの他寺に及び、後世に至るまで盛



んに用いられた²⁾。

前田家本『冥報記』が「喜多院点」の訓点体系で訓まれるのに対して、『今昔物語集』所収の『冥報記』出典譚も、表現レベルで前田家本との共通性があることは冒頭にもふれた。結論的なことから先に言えば、その関連性は、逐語訳という程には及ばぬにしても、前田家本『冥報記』と同系の訓点資料が『今昔物語集』編纂時には用いられたようである。さらに言うならば、現存写本の

ほとんどの祖本が、虫食いの跡の忠実な転写過程から、平安時代後期（1018-1159）と推定される鈴鹿本（奈良本）あるいは、それに最も近い祖本の系統に収斂される¹³『今昔物語集』の成立圏に、東大寺東南院の院務覚樹、あるいは法相宗中興の学僧である興福寺僧侶正蔵俊などの関与を想定される説も出されている中、その祖本の享受圏に興福寺が深く関わっていたことの蓋然性は極めて高いことが、様々な傍証資料から明らかになりつつある。そのような状況下、「喜多院点」による前田家本『冥報記』と『今昔物語集』との表現分析を精密に進めるための基盤整備が行われることは、『今昔物語集』成立論の考察に向けての新たな進展を促す重要な契機にもなり得るものと言えよう。

3. 前田家本『冥報記』の電子化テキスト作成

1) マスタテキストの作成

前田家本『冥報記』は、ヲコト点の判読の困難さと、その複製本自体が高価な稀観書と化したことによる資料の入手しづらさから、これまでその研究は十分になされているとは言い難い状況にあった。そこで、発表者およびその共同グループは、該書の状況から、さらに研究を進展せしめるべく、その完全な訓読・校訂・注釈と、索引の作成を行った（説話研究会『冥報記の研究』1・2, 勉誠社, 1999.2/2000.2）。

凡例			
¥ T 数字 5 桁	<冒頭のみ発生>	タグの意味: Title (タイトル)	
¥ S 数字 5 桁	<必須>	タグの意味: Shakumon (釈文)	
¥ H 数字 5 桁	<必須>	タグの意味: Honmon (本文)	
¥ Y 数字 5 桁	<発生時のみ>	タグの意味: Yomi (訓み)	
¥ C 数字 5 桁	<発生時のみ>	タグの意味: Chuuki (注記)	
¥ P 数字 5 桁	<発生時のみ>	タグの意味: Page (頁情報)	
¥ K 数字 5 桁	<発生時のみ>	タグの意味: Kouji (校異)	
¥ I 数字 5 桁	<発生時のみ>	タグの意味: In (韻)	
記述例			
¥ S 1 6 0 0 7	高の性雷を畏る 因りて正に等身ノ仏像ヲ念ず 俄アリテ〔而〕@霹一塵【Rヘキレキ】シテ其の堂の柱を震かす 侍婢一人走り出で階ニ及びて〔而〕死ぬ。		
¥ H 1 6 0 0 7	亮性畏雷【K一】 因正念等身仏像【K一】 俄而@霹一塵【Rヘキレキ】震其堂柱【K一】侍婢一人走出及階【K一】而死。		
¥ C 1 6 0 0 7	※本文「高」。高山寺本により訂す。		
¥ Y 1 6 0 0 7	性 人トナリ(名 法中八五): 雷 イカツチ(名 法下六六): 俄 シハラク シハラクアリテ(名 仏上一五): 震 ウコク(名 法下六九): 階 ハシ(名 法中四〇): 及 イタル(名 僧中五二)		
¥ K 1 6 0 0 7	*高性一(高) 亮性: *因正念等身仏像一(高) 因心念仏等像		
¥ I 1 6 0 0 7	霹【右下〇】 塵【右下〇】 侍【左下〇】 婢【左下〇】		

電子化テキストの作成に際しては、その修正・校正の煩雑さを考慮して、当初より電子化テキストの作成、さらには索引作成のためのデータベース化を念頭に置いて作業を進めた。この時点での具体作業の一端は既に報告したが¹⁴、マスタデータ入力作業を進めていた当時は、ワープロ専用機や MS-DOS パソコン使用者も混在していたため、テキストファイルによるデータ交換を前提とするデータフォーマットや記述形式を策定し、その記述規則には国文学研究資料館で開発された KOKIN ルールをカスタマイズしたものを案出した。

2) 版下の作成

上記マスタを表形式のデータベースに読み込み、表記の不統一や注記項目の重出箇所の修正を施した後、版下の作成作業に入った。

本プロジェクトは、かなり早い段階から版下作成を志す段階から電子化することを念頭に置いて作業が組み立てられており、版面作成から索引までの工程総ては、市販の汎用ワープロソフト（一太郎）およびデータベースアプリケーション（DB-Pro, 五郎）を使用して作成した。

実は、この方法を選択したのは、扱われるコンテンツが漢文資料であるというデータの特性と、文学研究者のみによる共同作業という体制上の特質に由来する苦肉の策でもあった。

マスタデータから、版下を作成する時は、ルビなどの情報も含むテキストデータを TeX

互換形式のソースデータに変換し、閑舎(本田博通)氏になる「一太郎テキスト DB ツール《清郎》」を使用して、振り仮名など所定の位置に配置された版面を作成した。

《清郎》は「一太郎 Ver6.3」にまで対応する Play Rite で記述されるマクロ言語で、TeX ソースの出力を一太郎に代行させる機能を持つ。最近のワープロソフトの表現力は格段に進歩しているので、このようなマクロ機能は本来ならアプリケーション側で実装されて然るべきと思うが、残念ながら本マクロは Play Rite 2 (一太郎 8 以降) の環境下では、ローカル関数の書き換え作業が必要なため、うまく機能しない。

こうした問題を生じる理由の第一には、文字処理・整形作業がすべて UCS2.0 (ユニコード) を基本とする文字セットを対象として行われることとなり、しかも外字の他、JIS 第一・第二水準を超える文字セットを扱うアプリケーションやツール類は、極めて数が少なく、機能も限定されたものとならざるをえなかったことが挙げられる。

『冥報記』自体は、全 56 話、原文は白文換算で全 20,779 文字、使用される全文字種は 1858 種という小規模なデータではあるものの、JIS X 208-1997 では覆いきれないものが 112 種もあり、さらに厄介なことに規格外文字で外字を作成せざるを得なかったものが 71 字もあった。その内、29 字は「今昔文字鏡」にも収録されるが残りは新規作成されることになった。

また、漢文返り点を使用した版面を作成するためには、たとえばレ点は行末に置かず、一・二点は行頭に置かないなどの漢文返り点特有の禁則処理が必要となる。さらには、索引作成のためにデータベース処理を行うには、JIS 第 1・第 2 水準以上の文字の他にテキスト固有の外字も 1 字として処理可能なアプリケーションであることも要件として求められた。

3) 索引の作成

かくして、前田家本『冥報記』についての翻刻・釈文(訓読)・校異・注釈は、『冥報記の研究 1』として 1999 年度末に上梓され、引き続き、索引編の刊行を目指して、作業を進めることとなった。索引作業を行うにあたっては、前年度に作成した訓読文を基礎データとして、その全漢字に新たに読み情報を付加することにより作業を進めることにした。

第二巻として企画したものは、釈文索引、漢字一字索引、傍書(朱書・墨書)、声点に関する調査であったが、索引作業の過程で部分的に従前の読みを修訂せざるを得ず、新たに釈文全体を載せた。

① 漢字 1 字索引の作成と問題点

漢字索引作成を作成するに際しては、その形成を支援する基礎データが不足していることが

```
*** 釈文部分 TeX 互換文書ソース ***
¥開始{文書}
《釈文》[00] 冥報記卷上序文
(1)冥報記上 吏部尚書唐臨撰
(2)夫れ氣を含みテ生有るモノハ識有ら¥ルビ{不}{ず}トイフコト無し。
(3)識有るモノハ〔而〕行有り。
(4)行ノ善悪ニ随ひて〔而〕其の報ヲ受ク。
(5)農夫の〔之〕¥ルビ{播}{ハン}¥ルビ{植}{シヨク}シテ所 - 植に随ひて〔而〕之を取むるガ如し。
(6)此れ蓋シ物の〔之〕常ノ理ナリ。
(7)¥ルビ{固}{まこと}ニ疑ふ所無し〔也〕。
(8)上智ハ其の本源に¥ルビ{達}{いた}リテ知りテ〔而〕見無し。
(9)下愚ハ其の¥ルビ{蹤跡}{しようせき}に暗クシテ迷ひて〔而〕返ら¥ルビ{不}{ず}とは皆絶 - 言なり〔也〕。
*** 本文部分 TeX 互換文書ソース ***
¥開始{文書}
《本文翻刻》[00]
(1)冥報記上 吏部尚書唐臨撰
(2)夫含氣 K1 有生 K1 無不 M2 有識。
(3)○ (有識 K1) 而有行。
(4)随行善悪 K1 而受其報。
(5)如農夫之¥ルビ{播}{ハン}¥ルビ{植}{シヨク}随所 - 植 K1 而取 Y2 之。
(6)此盖物之常理。
(7)固无所 Y2 疑 K1 也。
(8)上智達其本源 K1 知而无見。
```

問題となった。本プロジェクトでは、索引作成のために、今昔文字鏡番号に準拠した大漢和番号、部首、読み、画数、異体字等の情報を JIS X 221 (UCS 日本語面) のシソーラスを別に用意した。しかし、これらの情報はいずれも厳密な意味では一意には定まった値を持つものではない。それにもかかわらず、紙上で索引として定着させることは、データベースの作成作業以上に負担の大きいことでもあった。

たとえば大漢和番号は基本的に「正字」の字形に番号が与えられ、常用漢字などの新字体は「㇏」「𠂔」などの番号(ダッシュ付番号)が振られるため数値列として処理が行いづらいものとなっているのである。今昔文字鏡番号は大漢和番号と一致した値が与えられるが、新字体などのダッシュ付番号の付されるものを他の番号にシフトさせるとともに、同字の重出など、これまで版によって誤りのあった『大漢和辞典』の番号を、最新版により補訂した点で有効である。

JIS 漢字に大漢和番号が振られたデータ資源は決して多くはなく、しかも作成者によって微妙に異なりが生じている。そこで、索引作成支援のシソーラスとして、谷本玲大氏作製の ATOK 文字鏡番号辞書、池田証寿氏になる JIS X0212-1990 の区点番号と大漢和辞典番号を表示、さらには山口明德氏・相田満作製による国文学研究資料館外字セット、相田満作製による補助漢字シソーラスなどを基礎に、JIS X 0221-1995

*****原文翻刻*****
 72ウ 感暑於案上^(9c)而退立階下。^(10a)智感問之^(11a)対曰、氣悪逼公⁽¹²⁾。
^(10b)但通以案中事^(10c)。感省詭其案⁽¹¹⁾。如人問書。^(11a)於是⁽¹¹⁾。
^(10b)為判句之^(11b)有酒食来。⁽¹²⁾諸判官同食。⁽¹³⁾智感亦就之。
^(14a)諸判官曰、君既權⁽¹⁾判^(14b)不宜食此^(14c)。感從竟不食^(14d)。
^(14e)婦家⁽¹⁾蘇而方曉。^(15a)自⁽¹⁾後家中⁽¹⁾。喚⁽¹⁾吏後來迎^(15b)至^(15b)。
*****釈文(訓読文)*****
 72ウ 河東の柳智感は貞観の初めに以て長岑県の令(為)たり。△71ウ^[55]1b 一夜にして暴に死す。△72ウ^[55]1 明日にして(而)蘇りて説きて云はく、「始め忽ちに冥官の為に追され(所)て大官府に至る。△72ウ^[55]2 使者智感を以て王に見えしむ。△72ウ^[55]4a 王(之)に感に謂ひて曰はく、「今一員ノ官闕けたる有り。△72ウ^[55]4b 故に君の(之)任を担」といふ。△72ウ^[55]5a 智感辞する二親老ヲ以テス。△72ウ^[55]5b 且た自ら福業を陳ズるに『未だ存らずシテ便ち死す』といふ。△72ウ^[55]6a 王之を勘へし(使)めテ信⁽¹⁾然タリ。△72ウ^[55]6b 自ら因りて謂はく『君は未だ死に当たらず。△72ウ^[55]6c 権テ事ヲ判⁽¹⁾録すべ(可)し』といふ。

のシソーラスを作製し、部首・画数などの情報に補正を加えた上で漢字索引の基礎データおよびワーキングに使用した。

また、本プロジェクトでは、今後さらに、原本画像から文字を切り出して、字体包摂基準を明示できるような整理を行うことも予定している。

ただし、この点については、国語審議会の答申を受けて JIS X 208 が見直し作業にかかっている状況もあり、作業を留保せざるを得ない状態にある。

さらには、JIS X 213-2000 の問題も悩ましい。この規格は、従来外字として使用されていた領域に対しても漢字が宛てられているため、今回作成した『冥報記』データおよびデータベースとコードバッティングを生じる文字がいくつか発生してしまうという問題が発生するのである。両者の状況は、根本的な所でコンテンツの形成に大きな影響を与えている。可及的かつ最善の解決が図られることを願ってやまない。

...	[47] 19461 4 1	[50] 934 4 5
...	[47] 19462 4 1	[50] 13722 4 6
...	[47] 19463 4 1	[50] 16678 4 7
...	[47] 19464 4 1	[50] 19461 4 2
...	[47] 19465 4 1	[50] 19462 4 2
...	[47] 19466 4 1	[50] 19463 4 2
...	[47] 19467 4 1	[50] 19464 4 2
...	[47] 19468 4 1	[50] 19465 4 2
...	[47] 19469 4 1	[50] 19466 4 2
...	[47] 19470 4 1	[50] 19467 4 2
...	[47] 19471 4 1	[50] 19468 4 2
...	[47] 19472 4 1	[50] 19469 4 2
...	[47] 19473 4 1	[50] 19470 4 2
...	[47] 19474 4 1	[50] 19471 4 2
...	[47] 19475 4 1	[50] 19472 4 2
...	[47] 19476 4 1	[50] 19473 4 2
...	[47] 19477 4 1	[50] 19474 4 2
...	[47] 19478 4 1	[50] 19475 4 2
...	[47] 19479 4 1	[50] 19476 4 2
...	[47] 19480 4 1	[50] 19477 4 2
...	[47] 19481 4 1	[50] 19478 4 2
...	[47] 19482 4 1	[50] 19479 4 2
...	[47] 19483 4 1	[50] 19480 4 2
...	[47] 19484 4 1	[50] 19481 4 2
...	[47] 19485 4 1	[50] 19482 4 2
...	[47] 19486 4 1	[50] 19483 4 2
...	[47] 19487 4 1	[50] 19484 4 2
...	[47] 19488 4 1	[50] 19485 4 2
...	[47] 19489 4 1	[50] 19486 4 2
...	[47] 19490 4 1	[50] 19487 4 2
...	[47] 19491 4 1	[50] 19488 4 2
...	[47] 19492 4 1	[50] 19489 4 2
...	[47] 19493 4 1	[50] 19490 4 2
...	[47] 19494 4 1	[50] 19491 4 2
...	[47] 19495 4 1	[50] 19492 4 2
...	[47] 19496 4 1	[50] 19493 4 2
...	[47] 19497 4 1	[50] 19494 4 2
...	[47] 19498 4 1	[50] 19495 4 2
...	[47] 19499 4 1	[50] 19496 4 2
...	[47] 19500 4 1	[50] 19497 4 2
...	[47] 19501 4 1	[50] 19498 4 2
...	[47] 19502 4 1	[50] 19499 4 2
...	[47] 19503 4 1	[50] 19500 4 2
...	[47] 19504 4 1	[50] 19501 4 2
...	[47] 19505 4 1	[50] 19502 4 2
...	[47] 19506 4 1	[50] 19503 4 2
...	[47] 19507 4 1	[50] 19504 4 2
...	[47] 19508 4 1	[50] 19505 4 2
...	[47] 19509 4 1	[50] 19506 4 2
...	[47] 19510 4 1	[50] 19507 4 2
...	[47] 19511 4 1	[50] 19508 4 2
...	[47] 19512 4 1	[50] 19509 4 2
...	[47] 19513 4 1	[50] 19510 4 2
...	[47] 19514 4 1	[50] 19511 4 2
...	[47] 19515 4 1	[50] 19512 4 2
...	[47] 19516 4 1	[50] 19513 4 2
...	[47] 19517 4 1	[50] 19514 4 2
...	[47] 19518 4 1	[50] 19515 4 2
...	[47] 19519 4 1	[50] 19516 4 2
...	[47] 19520 4 1	[50] 19517 4 2
...	[47] 19521 4 1	[50] 19518 4 2
...	[47] 19522 4 1	[50] 19519 4 2
...	[47] 19523 4 1	[50] 19520 4 2
...	[47] 19524 4 1	[50] 19521 4 2
...	[47] 19525 4 1	[50] 19522 4 2
...	[47] 19526 4 1	[50] 19523 4 2
...	[47] 19527 4 1	[50] 19524 4 2
...	[47] 19528 4 1	[50] 19525 4 2
...	[47] 19529 4 1	[50] 19526 4 2
...	[47] 19530 4 1	[50] 19527 4 2
...	[47] 19531 4 1	[50] 19528 4 2
...	[47] 19532 4 1	[50] 19529 4 2
...	[47] 19533 4 1	[50] 19530 4 2
...	[47] 19534 4 1	[50] 19531 4 2
...	[47] 19535 4 1	[50] 19532 4 2
...	[47] 19536 4 1	[50] 19533 4 2
...	[47] 19537 4 1	[50] 19534 4 2
...	[47] 19538 4 1	[50] 19535 4 2
...	[47] 19539 4 1	[50] 19536 4 2
...	[47] 19540 4 1	[50] 19537 4 2
...	[47] 19541 4 1	[50] 19538 4 2
...	[47] 19542 4 1	[50] 19539 4 2
...	[47] 19543 4 1	[50] 19540 4 2
...	[47] 19544 4 1	[50] 19541 4 2
...	[47] 19545 4 1	[50] 19542 4 2
...	[47] 19546 4 1	[50] 19543 4 2
...	[47] 19547 4 1	[50] 19544 4 2
...	[47] 19548 4 1	[50] 19545 4 2
...	[47] 19549 4 1	[50] 19546 4 2
...	[47] 19550 4 1	[50] 19547 4 2
...	[47] 19551 4 1	[50] 19548 4 2
...	[47] 19552 4 1	[50] 19549 4 2
...	[47] 19553 4 1	[50] 19550 4 2
...	[47] 19554 4 1	[50] 19551 4 2
...	[47] 19555 4 1	[50] 19552 4 2
...	[47] 19556 4 1	[50] 19553 4 2
...	[47] 19557 4 1	[50] 19554 4 2
...	[47] 19558 4 1	[50] 19555 4 2
...	[47] 19559 4 1	[50] 19556 4 2
...	[47] 19560 4 1	[50] 19557 4 2

②釈文（訓読文）の句節索引ということ

冒頭で述べたとおり、漢文資料の場合は、その訓読文に対して索引が作成されることは、和文との表現比較の面、とりわけ漢文訓読という翻訳行為と和文との距離を分析する上で有効な資料となる。ましてや、それが電子化され、データベース化されることにより、様々な応用の可能性が拓かれる。

『冥報記の研究』で採用した訓読文の記述方法は、通常学校教育で行われる漢文書き下しの方法とは異なり、国語学で採用されるものである。すなわち、置き字や助詞・助動詞などは学校教育では、元の漢字を平仮名に改めたり、省略に付する漢字についても、〔 〕内に元の字を示すなどして、原文の全文字種が記述されるようになっている。そこで、訓読の索引作成については、釈文を基礎としたインデックス作成を行った。

『冥報記』の索引を訓読文を対象として作成するに当たっては、日本語の文節規則をそのまま適用するわけにはいかない。そこで、それに該当する概念として原漢文に対応する「句節」という概念を考えた。

たとえば、日本語と漢文とでは、助辞のありようなどが大きく異なっており、再読文字や置字なども異なる。そこで、原文の漢字に対する読みを基に、包括して一つの単位として把握しようとする概念を立てた次第である。立項に際しては、原文に存在する漢字に付随する送り仮名という形で分けをするが、置き字のような完全に不読の文字もレコードとして立て、「将（まさに…せんすとす）」のような再読文字は、日本語では二文節に区切られるものも一文節で扱うようにするなど、日本語世界で作成される索引とは異なった部分を生じている。しかし、このような単位系を考えることによって、日本人が漢籍受容に際して、訓読という手法で翻訳的享受が行われたものと、その影響下にある典籍（とくに『今昔物語集』）との分析が逐語的に検証可能となるのである。このことは、文学における分析研究を一段と精緻なレベルに押し進める契機ともなる。

具体的作業としては、まず釈文の版下データを句節の単位に分け、それに読みを付加する。それを表計算ソフトに読み込んだ上で修正、データベースソフトにてさらに属性情報を付加して索引版下を作成する手順で進められたが、この作業がデータ量としても膨大なため最も困難を極めた。紙幅の関係で縷々述べることは省略に付すが、たとえば、最終的な索引作成の結果、句節索引のレコード数は 17,110 件だが、ソーティングルールは存外に複雑を極め、マスターテーブルの属性は 47 項目に及んだ。また、各担当者によるデータ作成時のものも含む中間ファイル、関連テーブルを含めると 1G バイト（バイナリを含む）を超える容量となったことがその一端を物語ると言えよう。今後は、これら中間ファイル群についても作業過程が分かるような形で整備した上で公開に供したいと考えている。

4. 前田家本『冥報記』の句節索引で可能となったこと

《釈文》[25] (100a)ぶんぼん：文本／ちゆうしよじらう：中書侍郎／たり：為り
《釈文》[25] (100b)かけい：家兄／たいふきよう：太府卿／および：及び／ちしよふぎより：治書府御史／ばしう：馬 - 周／きふじちう：給事中／ゐこん：韋琨／および：及び／りん：臨／たいざせり：対坐セリ。

『冥報記』と『今昔物語集』との関係については既に様々に言及されてはいる。その検証方法は、これまで文レベルに止まるものであり、発表者も下巻第 25 話（55 話）について比較を試みたことがある³。その際、データも完成途上だった故、『今昔物語集』と『冥報記』の文を

対比させ、その文字数差に着目することにより大局的な比較を行うなどの基本的な手法を提示した。その後、近時、本プロジェクトの一員である渡辺信和氏により、改めて特徴的な説話を例に比較を試みられたので、それを踏まえて述べたい”。

印刷順,語定義,印本見出し,本見出,活用見出し,仮見出,自立語,活用 5 0 (決定版),索引語コード,活用形 I D (決定版),読み 1,平仮名読み 1,返読新句節,見出漢字(決定版),新句節積文,連番,新見出,話文 I D,話文丁行,話文 I D 2,話 I D,文 I D,文末尾,新見出し 2,見出語(決定版),一字下,索引語()内除去,1 字目,1 字目 Na,2 字目,2 字目 Na,3 字目,3 字目 Na,配列語 I D,見出漢字 5 0,見出漢字同,新丁数,新丁 1,新表裏,新行,新反読助動詞(決定版),活用形(決定版),同音異義 I D(決定版),活自マージ,印活用語見出し,印句節積文,印 1 字目 Na,印話文丁行,

その結果、『冥報記』と『今昔物語集』との間の距離は、各説話によって様々に差があることがより明確となった。まず、『冥報記』の表現と『今昔物語集』との表現には、非常に近い関係にある説話と、数の変更や、場所の変更など、大幅な変更のある説話がある。

また、『冥報記』と『今昔物語集』とは、文の区切りが大きく異なることも挙げられる。和文である『今昔物語集』では、助辞のない箇所ではその上下で文を続けて読む傾向がうかがえ、時には下の方の単語から返読されるべきではないような文字でも続けて、一つの文として捉えようとしている所もあった。このことは、句節単位での比較ではより明確に示される所でもあるが、『今昔物語集』の語順が大きくずれている所には、漢文の解釈に難渋して無理な訓みが行なわれたと思しき箇所もある。

全体的にうかがえることは、『今昔物語集』の編者は、『冥報記』から取材する際、主題・プロットは踏襲するが、極細部の表現には必ずしも拘泥することのない記述態度を取っているようである。

このことは、文から句節レベルへと着目単位を動かしてみると、どの語に対して言葉の置き換えがなされているかが、より明確になってくる。置き字の省略はもちろんだが、氏の報告に従えば、特徴的なもの一端としては、

第 21 話 「在」→「有」、「着」→「付」、「言」→「云」、「逢」→「値」

第 45 話 「進」→「奉」、「男女」→「男子」、「婦人」→「夫人」

などの用字法が挙げられる。漢文と和文の位相差は、特に和文における副詞、接続詞、あるいは文の流れのようなものに顕著に現れるようである。また、日本語の中に対応する語彙があれば、普通名詞も置き換えており、和文脈の世界に引き寄せてはいるものの、『今昔物語集』をその典拠となる漢文作品と逐語的な対照が可能であること自体、和文と漢文の距離は決して遠くないことは確かである。

この此 -0908>[56]6375 4 7	この云 -0027>[03]1407 4 3
この節 -1251>[03]2114 4 1	このクフ -0027>[09]1470 42 4 6
このかた -既来 -0515>[13]5421 4 5	この云 -既 -0027>[40]140 52 9 7
このかた -来 -0843>[23]2930 9 5	このクフ -名 -0027>[56]1102 57 9 7
このかた -来 -0843>[38]1104 51 9 6	このは -語 -1518>[23]2663 3 4 6
このかた -来 -0843>[49]2306 62 9 3	このひ -語 -1518>[23]1086 36 4 3
このかた -来 -0843>[49]2306 62 9 3	このひて -語 -1518>[09]1539 9 2
このかた -来 -0843>[49]2306 62 9 3	このひて -語 -1518>[26]1403 9 7
このころ -比 -0929>[00]1331 9 1	このひて -語 -1518>[26]256 38 4 5
このころ -比 -0929>[25]970 36 9 4	このひて -語 -1518>[47]136 64 4 7
このころ -比 -0929>[12]1417 4 3	このひて -語 -1518>[47]186 61 4 2
このころ -比 -0929>[12]1417 4 6	このひて -語 -1518>[50]1086 63 9 5
このころ -比(此)	このひて -語 -1518>[54]457 71 4 7
	このひて -語 -1518>[54]467 71 4 7
このまじ	このひて -語 -1518>[54]1331 4 6
このまじり -好 -0395>[15]2121 9 7	このま -語 -1518>[04]79 8 2
このむ	このま -語 -1518>[06]63 39 9 4
このみ -好 -0395>[37]1150 9 4	このま -語 -1518>[09]19 12 9 6
このみ -好 -0395>[50]1463 4 6	このま -語 -1518>[10]96 13 9 7
このみ -好 -0395>[50]1463 4 7	このま -語 -1518>[11]16 14 9 2
このみ -好 -0395>[33]1147 4 7 2	このま -語 -1518>[20]113 26 9 4
この心 -好 -0395>[05]114 9 9 7	このクフ -兼 -1518>[13]229 9 5
この心 -好 -0395>[35]1450 4 1	このクフ -兼 -1518>[26]38 9 2
この心 -好 -0395>[46]1450 9 2	この心【講】 -1518>[29]143 3
この心 -好 -0395>[51]1464 4 1	この心 -語 -1518>[29]144 42 4 3
この心が	この心 -語 -1518>[33]18 47 4 5
この心がはくハ -兼 -0155>[00]402 9 5	このクフ -語 -1518>[34]196 49 9 2
この心がふ -兼 -0155>[18]136 24 4 5	このクフ -語 -1518>[35]55 4 5
この心がクフ -兼	このクフ -語 -1518>[43]10 54 4 2
	このクフ -語 -1518>[45]138 57 4 7
この心がふハ -兼 -0155>[26]276 38 9 1	この心 -語 -1518>[47]20 61 4 3
この心がふ	このクフ -語 -1518>[50]17 63 9 2
この心がはくハ -兼 -0551>[00]63 4 7 1	このクフ -語 -1518>[53]236 66 4 5
このひやく -五百 -0039>[10]156 14 4 3	このクフ -兼 -1518>[53]766 69 4 1
このひやく -五百 -0039>[07]10 11 4 1	このクフ -兼 -1518>[54]166 71 4 5
このひやく -五百 -0039>[07]10 11 4 1	このクフ -兼 -1518>[54]414 3 1 4
このひやく -五百 -0039>[05]216 9 9 1	この心 -語 -1518>[54]144 71 4 7
この心	この心 -語 -1518>[55]366 73 9 5
この心 -心【語】 -0027>[09]112 9 6	この心 -語 -1518>[20]118 27 4 1
この心 -心【語】 -0027>[56]177 9 2	このクフ -兼 -1518>[37]36 50 9 4
この心 -心【語】 -0027>[09]171 2 9 5	この心 -兼 -1518>[23]50 34 9 1
この心 -心 -0027>[01]17 4 9 4	

5. 今後の展望

発表者を含むプロジェクトメンバー（説話研究会）では、『冥報記の研究』第3巻の刊行を予定しており、その中で、『今昔物語集』全体にわたる句節レベルでの比較とその意義についても報告する。その際、他の訓読漢文資料（たとえば『蒙求』『孝子伝』など）と翻訳説話と

